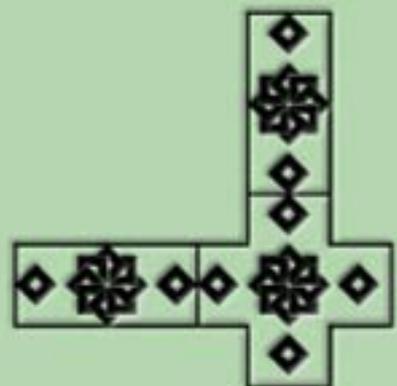


# シャンダイア物語

～守りの平野～

福田 弘生

Anima Solaris



## 第十六章

# 『ナデリ坂』

ソントールの第六の将パール・デルボーンの二人の友人シャイーとゲイルは、ランスタイン大山脈の山中でパールと別れた後、一万の兵を率いて月光の要塞を確保した。二人は要塞を注意深く点検して、そこが今すぐにでも使える状態にある事に驚いた。兵を配置につかせ、壮麗な要塞の廊下を歩きながら、赤い巻き毛のシャイーが床について自分の長靴の泥を気にして友人に言った。

「これは立派な要塞だなあ、しかしなんでここはこんなに綺麗なんだ」

色黒で精悍なゲイルが答えた。

「元々、五将の要塞の中では一番美しい様式で建築されたそうだ。それに昨年の冬、マコーキン將軍が通過する際に掃除して行ったらしい」

シャイーが天井を見上げると、そこには新しい蜘蛛の巣が張られていた。

「あの人らしいが相変わらず変わっているなあ。だが、変わり者でも彼の軍は間違いなくソントールの最強なんだろう」

ゲイルが首を振った。

「いや、だったと言うところだ。今では自分の家の兵とバーン侯爵の兵をあわせても兵力はせいぜい一万。かつての西の将の勢いは無いよ」

「それではハルバルト元帥の後継者争いからは脱落か。残

念、私欲の無い理想の指揮官だったけれど」

「余程の事が無い限り元帥になるのは無理だ。元々貴族の間には支持者が少ない人だったしね。尤もそれは東の将キルティアも同様だけどな」

シャイーは不満そうなため息をついた。

「やれやれ、そうすると残るのはやっぱりユマールの将ライケンか。首都の貴族達はごきげんをうかがうために兵をずいぶん送ったらしいぞ。ライケンはまずゼイバー提督に代わって海軍をおさえ、さらに元帥の地位も手に入れて陸海両軍を支配するつもりだと噂されている」

二人は要塞の東にある建物に入った。ゲイルがガラス張りの窓から中庭を覗くと、そこには大理石で囲まれた有名な泉があった。ゲイルは大きな窓を開けて息を吸い込んだ。

「ライケンを支持している商人ギルドの長レボイム以外の長老達が黙ってはいまい。ハルバルト元帥はそうなる前にライケン以外の後継者を選ぶと思うよ」

「貴族議会や巫女長の魔女もライケンを支持するかもしれないぞ。それにライケン以外と言ったって貴族でまともに兵を指揮できるのはパール様ぐらいのもんだろう。パール様は元帥のお気に入りだが、あの性格では元帥まで上りつめるのは無理だ」

ゲイルが低い窓枠に腰掛けた。

「パール様はロググを手中に入れたらマコーキン将軍に合

流するといひ。二人とも我が強いわけでは無いので、一緒になつてもうまくやっていけるはずだ。力を併せてセントーン戦で傷ついたキルティアとライケンを一気に排除してしまふんだ」

「マコーキン將軍とパール様か。確かに戦上手だが、それだけでライケンに対抗できるかなあ」

しばらく考え込んだ後、シャイイーが手を叩いた。

「そうだ、南の將の要塞を取り返すためにクラウス・ゼンダが行つただろう。彼と連絡がとれないだろうか。家柄、人格、戦鬪の指揮。先々を考えるとあの男が一番すぐれた將軍になる可能性がある。南からキルティアを牽制してくれればいい」

「うーん。あそこの指揮をとっているのはクラウスの親友のラムレス・ジョールの親父だから別行動は難しいだろうね」

二人は庭の泉を見つめた。シャイイーがボソリと言つた。

「ここはいいところだ。いっそ独立してしまえ」

ゲイルは黙つて肩をすくめた。

数日後、パールが宝石を散りばめたヘアバンドと短めの金髪を光らせながらふらりとやって来て、一人で要塞の門をくぐつた。門の上の見張り台で待ちこがれていたゲイルが大声で呼びかけた。

「やあ、パール様。この要塞十分に使えるぜ」

パールは片手を上げて挨拶すると、鋭く口笛を吹いた。すると猛牛のような魔獣がこれも待ちきれなかったように要塞の中の厩舎から走り出てパールに駆け寄った。パールはゲイルにどなった。

「カインザーのロッティ子爵はどうしている」

「まだリナレヌナに陣取っているよ」

「こつちに注意は払っていないのか」

「もちろん払ってるだろうが、動く気配は無い」

「よし、すぐに出撃だ。リナレヌナに向かう」

ゲイルはあわてて見張り台から駆け下りてきた。

「正気か、ロッティがこつちに向かって来れば全滅だぞ。」

ここからログを攻めるんじゃないのか」

「いや、俺達がログに着く前に追いつかれる。それよりランスタイン大山脈のベルターンのオアシスにいる軍勢を降ろす。ページとヒースは向こうに戻って指揮を取らせる事にした」

パールが要塞の中央の広場に進むと、そこには整列した騎馬兵と歩兵が並んでいた。シャイーが出迎えた。

「要塞の南にあるベーンゼルはさすがに大きな町だ。物資は充分に補給できた。馬はいくらでもいたんだが、軍馬に使えそうなのは三千揃えるのがやっとだった」

パールは嬉しそうに笑った。

「それでいい。七千の歩兵はここに残す。ゲイル、要塞の指揮をとってくれ。シャイーお前は俺と来い」

「あいよ」

シャイーは残念そうな顔のゲイルに手を振って答えた。

パールは魔獣にスタミナのつく食べ物を一かじりさせると、そのまま魔獣にまたがった。ゲイルが尋ねた。

「休まないのか」

「ああ、リナレヌナはけっこう遠いからな」

隣に並んだシャイーが号令をかけ、パールと三千の騎馬兵はリナレヌナに向けて出撃した。

.....

ロツティ子爵は、ランスタイン大山脈からリナレヌナに向かう街道の降り口、ナデリ坂と呼ばれるダラダラとした数キロに及ぶ長い坂の下に築かれた砦の前の平地で馬をせめていた。暑い日差しの下でただ一騎。供は短い黒い影と馬の蹄の音だけ。ロツティはこうやって考えをまとめる。そこに小太りの男が馬を走らせて来た。男はロツティの近くに來ると不安定な鞍から転げるように降りた。それはバルトールのマスター・トンイだった。トンイは息をきらして顔の汗をタオルでぬぐうとロツティに叫んだ。

「子爵、ソントールのパールの兵が月光の要塞に入りました。その数一万」

ロツティはドドドドと音をたてて馬を止めた。二人の間と二頭の馬は光と影だけで陽炎の立つ地面の上に浮き上がっているように見える。ロツティが渋い声で応じた。

「心配するな。歩行の兵一万より俺の騎馬軍団のほうがはるかに速い。ロググまでの競争なら負けないよ。月光の要塞にパールが入った時点ではまだ大きな問題にはならない」

「ええ、それはパールもわかっているのでしょう。ただパールはロググに向かわずこちらに向かつて来るのです。このままだと挟み撃ちにあいます。ここは私とバルトールの兵で固めておきますので、すぐに迎え撃ってパールを倒してください」

「うむ」

ロツティはうなずくと手綱を引いて馬頭をめぐらそうとしました。トニイは黙って立っていた。ロツティは馬を止めて怪訝な表情をした。

「どうした、パールを攻撃に行つて欲しいんだろう」

「いえ、こんなに簡単に引き受けていただけとは思いませんでしたので」

「ふむ、俺がどうすると思つたんだ」

「断られると思いましたが。私は軍団を指揮した戦闘の経験はほとんどありませんが、人と人の闘争はいくつもくぐり抜けてきました。本気で喧嘩をする時は仲間を分散しては

いけません」

ロツティは馬から降りた。

「その通りだ。軍を分けてはいけないのならば、街道の上のベルターンのオアシスにいる敵と月光の要塞から来るパールのどっちを攻撃する」

「パールが率いて来る兵の数はそれ程多くありません。しかし街道の上の敵が降りてきてはやっぱりです。全力をあげてオアシスの敵を討ちましょう」

「よく言った。その言葉を待っていた」

トナイは驚いた。

「最初からそのおつもりだったのですか」

「もちろんだ。この戦いで最も重要な役割を担うのはバルトールの兵だ。その兵を率いるマスターにその覚悟が無いのならばこの戦闘には勝てない」

「なる程。私の覚悟は信用してくださいまして大丈夫です。

ロツグにバリオラ神がお戻りになった今、私も兵も命をかけて戦う事に悔いはございません」

「死なれては困る。ベリック王は国を一つ創らなければならぬんだ。これまでの活動とは比較にならない程、難しい仕事がお前を待っている」

ロツティは軽々と馬の鞍に飛び乗ると、そう言い残して走り去った。

トナイに率いられた二万七千のバルトール兵はその日の夕方からランスタイン大山脈の木々の間を密かに通り抜けて、ベルターンのオアシス沿いに駐屯しているソントール軍の隊列を囲むように陣取った。

しかし山道を通ってソントール軍の本体に戻ったパール  
の友人のペイジとヒースは、これに気付いてすかさず全軍  
に警戒態勢を敷いた。

バルトール兵の配置を終えたトナイは、ナデリ坂に沿う  
ように築いた小さな砦から断続的に攻撃を仕掛けさせた。  
ペイジとヒースはそれに応じないように全軍に徹底した。

そこでトナイは坂の上のほうにある砦から順にソントー  
ル軍に攻撃を仕掛け、戦った後に砦を捨ててそのまま坂下  
に後退させるといふ作戦を取った。これにはソントール  
軍の先鋒部隊がつかわれて動き出し、小規模な戦闘が数日続  
くうちに次第にナデリ坂の下に向かってソントール軍の隊  
列が延びていった。しかしやはり全軍を動かすには至らな  
かった。

.....

その頃、テイリンは月光の要塞に向けて二千のゾックを  
率いて山を下っていた。そこにルフーの長レイユルーが知  
らせにやって来た。

「パールが街道沿いのオアシスに残してきた軍が、ロッ

テイ子爵と連合しているバルツール軍に包囲されています」

テイリンは率いているゾックを見回した。

(この小鬼達の飛翔能力を試す時が来たか)

「行くぞこれが私が望んでいた戦場だ」

レイユルは一声吠えてテイリンに告げた。

「ルフーは参加しません。あなたが白きアイシム神の魔法使いかもしれませんので」

「それで良い」

テイリンは短く答えると手を高々と上げた。二千の小鬼の背中のこぶから、細い鳥の翼のような羽が伸び、しばらくはばたくと一斉に飛び上がった。

「おお」

テイリンは顔を紅潮させて歓声をあげた。そして空に向かって呼んだ。

「アンタル」

テイリンの背後の谷の中からドラテイの子供の緑色の巨体が空中に浮き上がった。テイリンは身軽に木に駆け上るとアンタルの背中に飛び乗った。そして西の空を指差して叫んだ。

「西へ」

.....

マスター・トニイは自分が包囲している軍勢の緊張度が高まっている事を感じて坂の下にいるロツティに相談に降りた。

「敵は気付いていますね。次第に坂を降りては来ましたが、まだ全軍が動く気配はありません」

ロツティはうなずいた。

「すぐれた指揮官が残っているわけだ」

「後ろからの攻撃を開始しますか」

「いや、指揮官が不在ならばともかく、今のソントール軍だと後方の敵を攻撃するために引き返しかねない。やはり私が敵の先頭を叩いて引つ張つてこよう。一日の距離まで敵を引きずり出してくれただけでも、バルトール軍の十分な成果だ」

トニイは少し照れたような顔をした。

「おお、そうそう。パール・デルボーンについて調べてみました。彼はデルボーン家の跡取りですが、自ら軍に志願しました。貴族の子がこういう事をするのはとても珍しい。彼の部下達は貴族の次男、三男。皆家の厄介者です。この軍は自分達のみで、ソントール軍の中を泳ぎ回りながら力を付けてきました」

「なる程。他のソントール兵と手応えが違うのはそのためか。パール本人について何かわかったか」

トニイは困った顔をした。

「それが、どうも二十歳くらいまでの記録が無いのです。大病でずっと屋敷の中で暮らし続けていたとかで、その間の記憶は本人自身にも無いとか」

「ふうむ。パールは何歳だ」

「二十台後半から三十といったところでしょう」

「ほぼ十年程度で、あれだけの軍の指揮ができるのはおかしいぞ。屋敷の中にいたというのは嘘だろう。本当に記憶を無くしているとしても、その間に軍人としての経験があるはずだ」

「ならばそのパールが来る前に」

「ああ、上の軍勢を引きずり降ろしてやる」

ロツティは二万の騎馬兵の半分の一万を引き連れて街道を駆け上がった。そしてソントール軍の先頭に辿り着くと、街道を塞ぐように駐屯している兵めがけて激しい攻撃を開始した。そして散々に蹴散らした後、退却を開始した。ソントール兵達はそれを追うようにナデリ坂を下り始めた。

「かかったぞ」

ロツティはソントール軍を引き連れるように坂を下った。さらに傾合いを見計らってソントール軍の後方からトンイ率いるバルトール軍が一齐に攻撃を開始した。そのためソントール軍が坂を下る速度に勢いがついた。全軍が動き出したのを感じて、ソントール軍の中央にいた指揮官のペイ

ジとヒースは青くなった。ページがヒースに叫んだ。

「しまった。もう止まらない」

「じゃあねえ。この数で押し切っちまえ。こつちには十一万もいるんだ」

坂の途中の砦をトニーが放棄していた事がソントール軍に幸いした。ページとヒースに率いられたソントール軍はほとんど無傷でナデリ坂を駆け下りた。しかしそこに待ち構えていたのは、街道の出口の両側にロツティが築いた巨大で堅固な砦だった。両方の砦からは大弓の矢が雨のように放たれ、ソントール軍は血まみれになって坂下の平地に満ちた。

坂の下ではロツティの家臣のエンストン卿が率いる二万のカインザー歩兵と、本隊に戻ったロツティ自身が率いる騎馬兵二万がソントール軍の先頭を打ち崩した。一時間近く激しい戦いが続いた後、エンストン卿がロツティに駆け寄った。

「お館様、敵が多過ぎます。さすがにこの数を一気に殲滅するのは無理です」

ロツティも半月刀をかついで答えた。

「そうだな、途中で躊躇でもして少しは速度が落ちるかと思っただが。トニーが敵のケツを叩き過ぎた」

「バルトール人は元々戦意が旺盛過ぎるくらいがあります

ので。それで、どういたしますか」

「機動力はこつちにある。あきらめずに敵の隊列から飛びだした兵を叩け。あの大軍を分散させるとやっかいだ」

ロツテイ、エンストン、トンイの軍は懸命にソントール軍に攻撃を繰り返した。しかし粘液質の液体が流れ出るように、次第にソントール軍はリナレヌナの南の平地に満ちていった。

ナデリ坂の下で死闘が続いている最中、リナレヌナでは次々に運び込まれる負傷者を看護する指揮にリビトン老人が駆け回っていた。老人は小さな黄色い太鼓を手を持って、音頭をとるように看護兵や市民達を指揮した。

やがてさすがに声が枯れたりビトン老人は、一息ついて水を飲むとふと空を見上げた。するとその空の彼方に黒い無数の点が見えた。

「ああ、何だべなあ」

老人は小手をかざして見つめていたが、アツと叫んで太鼓を連打すると、近くにいた兵を呼んだ。

「ロツテイ子爵に知らせてこい。東の空から何かがやって来る」

(第十七章に続く)



## 著者紹介

福田 弘生 (Fukuda Hiroo)

<http://www.sf-fantasy.com/magazine/novelist/h-fukuda.html>

## 作品紹介

[http://www.sf-fantasy.com/magazine/novel\\_/chandaia/index.shtml](http://www.sf-fantasy.com/magazine/novel_/chandaia/index.shtml)

## まも<sup>へい</sup>の平野<sup>や</sup> — シャンダイア物語 —

---

---

2004年8月8日 第1版第1冊発行

著者 福田 弘生 (Hiroo Fukuda)

発行人 中条 卓

発行所 アニマソラリス

URL <http://www.sf-fantasy.com/magazine>

制作 松谷 和加子 (電腦工房 りっくらっく)

表紙 三上 央子 (電腦工房 りっくらっく)

---

---

本書の文章及び図面、イラストに関しては一切の無断転載禁止させていただきます。

希望される場合はメール ([master@sf-fantasy.com](mailto:master@sf-fantasy.com)) にてご相談ください。